

沖縄県八重瀬町字東風平の水をめぐる生活誌

1945年～1960年代を中心に

The Monograph about the Daily Life Concerning Water in the Kochinda Village Yaese Town Okinawa Prefecture : Focusing around 1945～1960s

神谷智昭

KAMIYA Tomoaki

はじめに

① 東風平地域の歴史と水環境

② 字東風平における水利用

③ 考察

おわりに

【論文要旨】

琉球諸島に住む人々は慢性的に水不足に苦しんできた。琉球王国時代には旱魃は飢饉につながり多くの死者を出したため、1～2ヶ月以上も雨が降らない日が続くと、琉球王府は王府主催の雨乞い儀礼をおこなった。慢性的な水不足をもたらす自然環境は、琉球諸島に住む人々の水の入手方法、水の利用方法、水に対する意識等に大きな影響を与えることとなった。

沖縄島の南部に位置する八重瀬町東風平地域は、沖縄島内でも水の少ない地域である。そのため住民たちは伝統的に、農業用水や生活用水の確保に苦勞してきた。本稿では沖縄島において近代的な給水体系が整備される以前にあたる、終戦直後の1945年～1960年代に字東風平に住んでいたある家族からの聞き取りを通して、この地域における水をめぐる生活誌を描くことを目的とした。そのために①河川水の利用、②井戸水の利用、③天水の利用、④クムイの利用に分けて、当時の人々の水利用の実態を詳述した。またその後の生活に大きな変化をもたらすことになる水道導入までの過程についても触れた。

調査の結果明らかになったことは、1945年～1960年代の字東風平における様々な水場・水利用の場面において、他者との関わりがみられたことである。住民は共同井戸の利用や水資源の融通を通じて、情報交換し、交流し、情緒的繋がりを再確認していた。また、貴重な水資源を数回に渡って利用するという工夫も見られた。そうした状況は水道導入によって大きく変化した。水は蛇口をひねれば出てくる便利な物質となり、豚舎の汚物とともに排水口に流されるようになった。そして住民も水場に集うことがなくなり、共同井戸などの水場は次第に住民の記憶から消えていった。水道導入以降、明らかに水・水場に対する意識が変わった。

今後の課題としては、①地域ごとの水をめぐる生活誌を詳細に記述すること、②水がもつ社会的機能をより明らかにしていくこと、③水道普及後の生活の変化について丹念に調査すること、が残った。

【キーワード】 琉球諸島、東風平、水資源、水利用、戦後